

---

# 88の連奏曲

昭成

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

88の連奏曲

### 【Nコード】

N2438P

### 【作者名】

昭成

### 【あらすじ】

渡瀬城は、とあるイベントを迎えた。

友達の双子——風見姉妹から届いたメール。

今まで、片方ずつであれば相手をする事もあったが、今回は違う。

初めて、同時に来た。

これすなわち——修羅場？

## 双子とダブルブッキング。(前書き)

ピアノの突っ込んだ話はしないので、マジな音楽の話が見たい方は  
回れ右。あ、『戻る』お願いします。

## 双子とダブルブッキング。

午後の一時半。

昼休みが終わる直前、渡瀬 城の携帯には、二通のメールが届いていた。

『 風見 凜 今日の放課後、音楽室に来て。 』

『 風見 優 今日の放課後、音楽室に来てほしい。 』

二人から城に送られてきたメールは、どちらも『送信時刻——1：28』となっていた。要件も同じで、どことなく字面も似ている。言い切っているほうが姉。ちゃんと『お願い』をしているのが妹だ。しかし、問題は二通同時に来たことだった。

——ようするに、ダブったのである。

「一人ならともかく、あの姉妹二人をいつぺんに……巻き込まれるなんて冗談じゃねえ……」

メールを見てひとり呟いた城。まだ『諦めて同時に相手をしてやる』などという選択肢は無く、断りのメールを打ち始めた。

『悪いけど、今日はちよつと用事あるく——』

メールを打つ途中で、再び城の携帯にお知らせが表示された。

『新着メールが二件あります』

城はなんとなく嫌な予感を抱きつつ確認すると、文の中身はまたも姉妹そろった内容だった。

『——分かってると思うけど、来なかったら……怒るよ（んだからね！）』』

口調は違っているけど結局のところ、姉妹そろって拒否権を渡す気はないようだ。

おまけに聞こえたチャイムの音を耳にして、城は諦めた。

どうせ昼休みも終わり。そして今日は五時間授業——次の休み時間はもう『放課後』だからだ。

扉を開けると、音楽室では既に二人の少女が睨み合っていた。

「で、なんで優が……」

「なんでお姉ちゃんが……」

「ここに居るの（よ）？」

音楽室では冷戦が始まっていた。

濡れ羽のような黒髪を、姉は左右二つに縛って伸ばし、妹はそのままにしたロングヘア。顔つきはどちらもまったく同じ。お互いに冷やかな目線をぶつけあっている姿は、鏡に向かって表情練習でもしているようにしか見えないほど瓜二つだ。

強いて違うところを挙げるなら、髪型と目つき（よく見るまでは分からないが）と話し方と……ようするに気性というか性格というか、それくらい。あとは全部一緒。どこまでも一卵性双生児であった。

「……城、説明して」

城は黙って携帯をとりだし、先ほどのメールの文を見せた。

「お前ら、ほんと仲が良いのな（行動だけだが）」

そのまま表示を切りかえ、受信した時刻も見せた。『13:29分』。チャイムが鳴る寸前だった。

「「良くない」」

「え、いや、イタズラで一緒に送ってきたんだろ？」

「「違う」」

「え、じゃあ……知らなかったのか？」

「うん、優が……」「そう、お姉ちゃんが……」

「「謀った」」

「え、マジで！？ 打ち合わせとかしてないのか、これ？」

城の問いかけに、二人は首を縦に振る。もちろん同時に。

「……まあ確かに、クラス違うから送ったときにはそれぞれ教室に居たんだろうし……うーん、さすがに一卵性ソーセージはやばいな、奇跡すぎる」

「ねえ、城。下らない事考えてないで教えてほしいんだけど……どつちの約束を聞くの？」

「城、『なんか朝食のメニューみたいだな』とかは考えなくていいから……早く決めて」

「……エスパー？」

城はフリーズした。

暫く固まった後、ようやく解けて、言葉を続ける。

「つつてもなあ……決めるといわれても、別に、毎度のごとく演奏聴くだけでいいんだろ？ たまたま一緒になっただったら、二人で聴かせてくれればいいじゃん。俺は大丈夫だぞ？」

「「ダメ」」

「……何でやねん」

どうしたものかと思案する城に、姉が助け舟（？）を出した。

「……そういえば表示の順番はアタシのほうが先みたいよ。ねえ？」  
そう言いながら目をつり上げつつ腕を組み、何かを要求するように妹を睨む。

「私のほうが文字数が多かった。メールを打ち始めたのは私のほう

「が早い」

妹のほうは、素知らぬ顔で言い放つ。

「——だから優は（お姉ちゃん）出て行きなさい（出て行って）」

「」

結論もばつちりシンク口。お互い譲る気は無いらしく、見事な『犬猿の仲』だった。見た目は一緒なのだが。

「大体優がこんなところで城に聴かせてるなんて聞いてないんだけど！」

「むしろ、なんでお姉ちゃんが城に演奏聴かせてるの？」

親の敵にでも出会ったようなやりとり。しかし城は、雰囲気ではなく会話の中身に違和感を覚えた。

「あれ、何だ？ まさか二人とも知らなかったのか？」

「「初耳（よ！）」」

「何でいままで言わなかったわけ？」

「いや、普通に知ってるものかと」

「お姉ちゃんと私は、今までは交互にピアノのレッスン受けてたから……それに、学校で何してるかなんていちいち聞かないよ」

「あー、そうなのか」

——確かに、『城に演奏聞かせた』なんてわざわざ相手に報告する義理もない。かといって、別に内緒にしておく理由もない。一年以上たつてもお互い雑談にすら出さずに内緒にしているのは……何か理由があるのだろうか？

「とにかく、城と会ってるなんて聞いてないよ？」

珍しく妹が先手を取った。

「そ、それはアレよ、れ、練習相手！ 練習相手なの！」

「……城は私の練習相手。だから他を当たって」

「そんなの知らないわよ！ 大体あたしは入学したときからたまに

「」

「それなら私だってヒマな時は——」

しばらく続く言い争いをよそに、城は腕を投げ出しながらボーッと欠伸をしていた。

「……そうだ」

しかし雲行きが怪しくなってきた。

「どっちが残るか——城に決めてもらえばいい」

「俺の自由権が軽視されているから困る」

そんな制止の声など届くはずもなく、

「いいから選べ！」

「いいから選んで」

城は、近づいてくる静と動による圧力に、抵抗ができなかった。

「当然あたしのメールが先に届いたんだから、分かってるわよね？」

「当然私の方が先にメールを打ち始めてたんだから、分かってるよね？」

姉妹の問い詰めによって、既に城は音楽室の隅付近に追いやられていた。

バツハやらモーツアルトが引つ掛けられている壁に背をもたれつつ、城は説得を試みた。

「いいじゃん、二人で仲良くやれば——」「却下」——  
左様で……」

にべもない。

「……いいから、ちゃんと選んで」

姉妹が謎の威圧感とともに、さらに城を壁へ壁へ追い詰めていた。城は壁を背中全体に感じながら、視線を巡らし逃走経路を探る。

「いいじゃん、別に真剣勝負してるわけじゃあるまいし……」な？

ほら、たまには仲良くしろって、な？ な？ ほらほら凜も優も落ち着いて、平和に平和に、穏便に……」

体を右へ左へと向けながら必死に姉妹をなだめる姿は、傍から見たら中々シユールな光景だが、姉妹は笑う様子も和む様子もない。

「「ちゃん」と選 び な さ い」

その後小さい声で「「……勝負なんだから」」と加えられた。

声は聞こえていたが、城にはその意味するところが理解できていなかった。

「「……よく分からんけど、まあ、勝負だつて言うんなら仕方ない……」

……」

「「……っ！」

「「……っ」

息をのむ二人に向かって、城は言葉を発した。

「どうせ聴かせてもらうわけだし……『アレ』で決めたらどうだ？」

そう言いながら、音楽室の真ん中にあるピアノを指差した。

城としては名案のつもりだったが、彼女たちからしてみれば提案は気に入らなかつたらしい。二人に半目で睨まれていた。

「もしかして今日俺は蔑まれるために呼ばれたのか？」

「「……もういい、別に」」

同時にため息。シンクロのペアでも組めば、いい線いきそうなレベルであった。

そして城に詰め寄っていた二人は、威圧的な目線の矛先をお互いへと変えた。

「優……」

「お姉ちゃん……」

「「……勝負！」」

二人の間で火花が散って。バトルが幕を開けた。

「なあ、結局なんで勝負までする必要があるんだ？」

「「うるさい唐変木」」

姉妹の間で、城の人物像は共通らしい。

## 双子とダブルブッキング。(後書き)

三人称(?)に挑戦してみたくて書いた。

……感想ご批評、コツ等々、あれば是非ともよろしくお願い以下略。

ちなみにタイトルは勢いで付けたので連奏曲とかあんま関係無いです。

それでは。

## 対決・熱情

午後の三時半を回ったころ。窓の外は眩しいほどだが、暗雲が立ち込めていた。

「勝負よ優！ 今日のところは、負けたほうが家に帰ること」

「曲は城が決めてくれればいい」

「……そうね。さ、城、決めなさい」

険悪な雰囲気姉妹の前に、城は考え込む。——どうしてこうなった？

しかし、考えたところで分かるはずがないわけで、おとなしく聞いた。

「あのーどうしてそんなに、二人そろって張り合ってるんでしょう？ 別に、どっちか片方となら、演奏くらい今までもけっこう聴かせてもらったわけで……」

「「細かいことはいいいの！」」

城が感じたのは、殺気にも似た気配のある視線だった。

ここで『細かいか？』と返すことがそのまま泥沼行きであることくらいは、城も何となくは分かっている。

「ハイ……曲選ビマス」

ため息半分に謝罪して、課題曲を考え始める。

以前、城が学校内で耳にした噂が本当なら——この姉妹は『コンクール上位の常連』、『音大教授とピアニストの子供らしい』、『既に金が取れるレベル』とか——『姉妹に一曲選んで弾かせて聞か比べ』というのはもはや貴重を通り越して罰当たりな出来事であるはずだが……城はあまりありがたみを感じていない。そもそも最初聞いたときも、ほとんど『聞かされた』に等しい状況だったし……

城が物思いにふけっている間に、しばらく時間が過ぎていたらしい。

「まだ決まんないの？」

声に出したのは姉だけだが、不満げな視線は城に向かって二方向から刺さっていた。

「あーそうだった。……そうだな、壁のベートベンと目が合った気がする。『熱情』にしよう」

「適当な……」

「弾くのは慣れてるけど、さすがに長いよ？」（ちなみに三つの楽章合わせて20分以上かかる曲である）

「まあ、いいじゃないかいじゃないか。音楽室に俺を招待してくれたってことは……二人そろってヒマだったってことだろ？」

城のどうみても適当な物言いにしばらく考えていた姉妹だったが、

「乗った」

その一言（二言？）で、戦いの火蓋が切って落とされた。

凜と優がピアノに近寄り、

「あたしがやるわ」

「私からやる」

「……城」

お互い視線を交わした後で、そろって城のほうを向き一言。

「あー、分かった分かった。（ていうか何となく分かった。勘で）

……じゃ、優からでいいか？」

「なんであたしじゃないのよ」

「城が、私 を 選んだからだよ。お姉ちゃん」

ここぞとばかりに勝ち誇る妹。

「うぐっ………そうなの、城？」

城に中てられたのは、何かを伺うような視線。『なんで優なの？』と言いたいらしいと判断し、姉に答えた。

「ん、優じゃダメなのか？ お前クラスになれば先に弾いたところで有利不利も無いし、別に近いほうからでいいだろ？」

「むう………」

すると、今度は妹が不機嫌になった。

「え……あ、そ、そうよね！ 近いただけだし、優からでいいわよね！ 物理的に距離が近いだけだし！ 譲るわ！ 優のほうが『ピアノに』近いから！」

そして姉のほうはいきなり声の調子が上がった。何が大事なのか、同じことを何度も繰り返していた。

「むうっ……！」

テンションの上がった姉と、さらに頬を膨らせる妹を見て城は言った。

「なあ、やっぱ今日二人ともおかしくないか？ いつも二人で聞いているときはそんなにキョドらないし……情緒不安定なお年頃？」

「誰のせいで……っ」

「え？ 俺なのか？」

「……（こくり）」

心底不思議がる城に、姉妹の視線が刺さる。詰め寄られた城ができることといえば、

「まあまあ、優から始めようぜ！ な？ な？」

逃げの一手だった。

観客一人の演奏会が終わったところには、時計は既に五時を回っていた。西日が眩しい。

「……で、どっちのほうが良かった？」

「正直に言ってくれればいいから」

二人ともおよそ20分もの演奏を終えた割には、あっさりした聞

き方だった。姉は準備室の棚から引つ張り出した『熱情』の楽譜を（もう終わったので意味が無いのだが）見て、妹は歴代音楽家の肖像画を見ている。絵やら楽譜を見ながらそっけなく質問しつつ、時々城のほうへと視線が動いていた。

「えーと、どちらも甲乙付けがたいし、引き分け——うおっ!？」

しばし考えた後に城が答えようとしたが、途中で謎の圧力を感じ取った。

「適当に」

「答えていいとは」

「言つてない!」

圧力の正体は、『シンクロナイズド抗議の視線（ペアの部）』だった。絵と楽譜に向かっていた二人の視線が、体ごと城のほうへと向けられていた。

「あのねえ、この際だから言っけど……今回は白黒付けるいい機会なの! わかる!？」

「中学一年のコンクールはお姉ちゃんの勝ち、二年のコンクールは私の勝ち、三年のコンクールはどっちも予選落ち……つまり、今が決着をつけるチャンスなの、わかった?」

「わ、ワカッタ、マジで考えるからちよつと待ってくれ……」

突然の押し付けるような物言い（後になって、よく考えれば最初からそうだったと思い直す）に驚きつつ、城は目を閉じて、指先で机をトントンと叩き始めた。

「よし!」

丸々三十秒ほどの沈黙の後、ようやく城が口を開いた。

期待とも不安ともとれる表情のまま黙っている双子に対し、城はさらに続ける。

「やっぱり——引き分け、だ」

「……ハア!？」

姉は楽譜を机に叩きつけ（道具は大事に扱いましょう）、妹のほ

うは、思わず『偉大な音楽家の皆様を射殺すつもりだったんですか？』と問いかけたくなるような視線を城に向けていた。『許さん』とか『ふざけんな』とか『表出るや』とか、二人の表情は、その手のオーラで溢れかえっていた。

「ま、待て、話し合おう！ 今度こそ、マジメに考えた結果なんだね、マジでマジマジ落ちて着いて下さいって！」

「……………」

無言で近寄ってくる様子は、威嚇しながら間合いを詰める猫のようだが、一応は落ち着いた。

「落ち着け落ち着け。ちゃんと理由も言うから」

「まず第一楽章、出だしから中間部にかけては割と緩やかだ。ここは優の勝ち。というか、凜は最初から感情をこめすぎ。ところどころ叩く和音のところは優と比べて圧倒的に良かったけど、後とのバランスが悪くなるから抑えるところは抑る。後で收拾つかなくなるぞ」

「……………ぶい」

「くっ……………」

姉に『どうよ？』と視線をやる妹。字こそ優しいと書くが、意外とえげつないリアクションだった。姉は、対照的に悔しがる。凜とした要素はない。

「次、中間部から後半。凜の勝ち。理由は真逆だ。今度は優がダメ。丁寧にしすぎて迫力が死んでる。丁寧なのは悪くないが、緩いところと音量の差がなさすぎて盛り上がらん。……………で、凜のほうは文句なし。『熱情』ってタイトルはベートーベンが付けたわけじゃないが、まさしく『熱情』だった。締めもかっこよかったしな」

「そ、そうよね！ 自信あったもん！」

「むむ……………」

「よって第一楽章は引き分け。で、全体通して緩やかな第二章は優。激しい第三章は凜。三楽章のほうが重要だし、凜かとも思ったが…

…最後はさすがに暴走しすぎてた。で、それを差し引きすれば、引き分け。二と三楽章の細かい理由は……言うまでもないだろ？ どちらもどっちだ」

「……そう、ね」

「仕方ない……」

二人そろって残念そうな、納得したような、そんな顔だった。

「しょうがないわね。今日は諦めるわ。……ところで……あたしは『見本』が見たいんだけど？」

「わ、私も、聞きたい」

一人だろうが二人だろうが関係ないらしい。毎度のこと、最後は姉妹が伺うように『見本』を求める。

そして、

「断る。素人だしな」

これも毎度のことだった。

「いい加減その見え透いた嘘はやめてほしいんだけど？」

「……城は嘘つきだね」

城が感じたのは、いつものようなどこか遊び半分のものではなく、今度こそ、本気で『何か』を探られるような目だった。

「俺は聞き専門だから弾けないって言うてんだろっ！ 今日はお開き、お開き、それじゃ！」

城は逃げ出した（RPG風に）。

## 対決・熱情（後書き）

熱情、とてもいい曲です。

第一楽章のラスト一分（奏者により若干異なるけど）、第三楽章のラスト一分半ほど（奏者に以下略）の和音の連打がカッコよすぎて涙目です。

この文章を見る余裕のある方は是非ともyoutubeとかで『a p p a s s i o n a t a 1（もしくは3）』と入れて聞いてみてください。（CDも買うといいよと宣伝）

挨拶もせずに宣伝しつつ……それでは！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2438p/>

---

88の連奏曲

2011年2月12日16時55分発行